

緑の炎

古い街の中心に一軒の旅籠がある。あまり旅籠としては有名ではないので泊り客は滅多にいない。むしろ、看板娘サラと名物弟セルジュの二人がフロアを切り回す、暖かい食堂として街では有名なフォンク亭。聞けばユクトランドという国ができる前、その時から既にあったという古い店。そこに、一人の旅人がいた。

そこで彼は……働いていた。

「ごめんねヨハンさん。わざわざやって載いて」

「別に構わない。こういうのは慣れてる。それより手伝っただけで宿代が安くなるという方はいいのか？」

「いいのよ。お母さんも泊り客で儲けようと思ってないの。どちらかという食堂の方が回らないと困るのよねえ……」

「なるほど」

「でもヨハンさん慣れてるって……旅先でこうやって宿代浮かしていたのかしら？」

「……いや、まあそんなものだ」

実質は司厨長につかまって兵舎の皿洗いをしていただけ。なんと言えはいいのかわからないので適当にごまかす。サラは額面どおりに受け取ったらしく、意外に旅行費を浮かす方法だと笑った。皿洗い専属の人間を雇うのはどうかと聞いてみたら、本来はセルジュがその役を担うはずだったので暢気な口調を崩さず言う。

「そうだったのかよねーちゃん……」

「でもねえ。セルジュだと、洗いあがるお皿よりも割ってしまってお皿のほうが多くなるから、お母さんと話してフロアに出てもらおう事にしたのよねえ」

「うそっ」

「ホントよ」

嘘など言っただうするの、と顔色を変えずに言い放つ。

「……時に肉親は誰よりも容赦のない相手だ、セルジュ」

「ああ、キモに銘じとくことにするよ」

半泣きでサラの後姿を見るセルジュを、ヨハンは泡だらけになりながら微笑ましく思った。

ユクトランド国境付近、湖沼と森林地帯に囲まれた小さな、けれど歴史ある街ロランド。風に色があるならばきつと明るい色だろう。たまりにたまった休暇を無理矢理もぎ取って灰

色の祖国から出た先は酷く鮮やかで目が痛い。正直なところ、こんなに鮮やかな色があるとは思っていなかった。

「……いや、忘れていただけ」

思い直す。そう、昔は知っていた。祖国が何をしているのかわらなかつた頃。自分が何をしに行くのか理解しなかつた頃。ふと皿洗いの手を止めて泡立つ洗い場で佇む。泡がじわりと色を変え、毒々しい緑へ。そして一気に赤へ。

「!」

目を強く閉じたまま開く。泡は普通の泡。少し汚れが混じった普通の、綺麗になるための泡だ。

「ヨハンさん、またこれもお願いね。こちらはもう出来ているのよね?」

「……あつ……ああ、まだ拭けていないが」

「そこまでして頂かなくても大丈夫よお。洗ってくれているだけで大助かりだわ」

マイペースな笑みを崩さずサラはヨハンの隣に立ち布巾を構える。男がそれを視界の端に捕らえるや否や、何事かと思うほどの速さで水分が拭き取られた皿が積み上げられていく。それなりの時間掛かってヨハンが洗い上げた洗ひ物は数分も掛からずすべて拭き取られていた。

「……凄いな、その技は」

「これはもう昔からやっていたのよねえ。セルジュが小さか

った頃からかしら。あの子が病気がっかりするからお母さんが動けないのね。代わりに私ができることを始めたのがきっかけ」

「それはもう職人の域だ」

「うふふ、褒めても何も出ないわ」

言った後手を軽く叩いた。

「いや、出るのよ」

「ん?」

「今の分が終わりましたら一休みしてくださいね。午後からはまたお願いすることになるでしょうけれど」

「褒めてみるものだ」

「ふふふ」

泡の向こうでサラが可憐に微笑んだ。

自分にあてがわれている部屋に戻り、作りつけのテーブルの上に置いてあった本を手にとつてからベッドへ。今の時間は直射日光が入ってこない為読書は窓際でするのが一番いい。「本の内容は、真つ当な労働をした後に読むには少し重いな」エリカから渡された重厚な本。装丁の趣味が良いなとまず見たときに思った。誰の本を借り出したのかは知らないが、祖国の、それも特定の知識階級にしか出回らないような本がロビュにはあるらしい。もしかしたら自分が知らない国

の本も集まっているのかもしれない。

手にもった本はエリカから読んでくれと頼まれたものでそれ自体は終了しているが、帰りにいろいろあつたので返しそびれていた。またそのうちに店にくるだろうのでその時までと預かる事に決めて大事に置いてある。

「……まさか俺が飛行機について講義のようなものをするこ
とになるとは」

一体自分はこの国に何をしに来たのだろう。本来の目的だつた認識票はまだ鞆の奥底に眠っていて渡せず、何も知らないはずの旅行者が整備士に飛行機の事を語る。話を聞いていた彼女の目は、目の前にいる男は一体なものなのだという問いがはつきりと見て取れた。けれどそれをあえて聞いてこなかったのは彼女の優しさなのだろうか。

ページを繰る。異国で慣れ親しんだ国語を見ると不思議とほつとした。そしてそんな感情を持った自分に驚く。

「内容は……もう本当に帝国では当たり前になりすぎたものばかり」

目次の項目を見、各章の冒頭もついでに数ページずつ眺めていると教練所時代を思い出す。あの時と違うのは、自分が教わる側ではなく教える側にいるということと、周りに嫌味な同期がない事。あの同期は今どここの部隊にいるのだったか。飛行機が投入された直後の戦いで落ちたものも確かいた。

しかも、離陸に失敗したとか、交戦する前に手違いで機体が損傷したとか。

訓練で動かすのと実戦で動かすのとは違うのだ。そう同期が大怪我をして喚いていた。ヨハンとしては、本当にそれは正しいのだろうかと疑問である。訓練で飛ぶのも実戦で飛ぶのもたいした違いはない。確かに交戦すれば相手の機銃掃射があるが、それに行き着く前ならば一緒なのにといつも思っ
てしまう。

「……」

軽く頭を振って脳裡から浮かんたビジョンを追い払う。思考が走りすぎて余計なものが見えそうになった。

「彼女は、どこまで知識を吸収していくのだろうか」

初めて会った日に話した内容を思い出す。そして先日、町外れの廃墟で催した小さな勉強会を思い出す。質問と回答が積み重ねられて進んだあの会話から、彼女は自分の知らぬものに對し怯える事をせず、まっすぐに自分の置かれた状況を理解しようとしている。自分とは違う。

『ヨハンの目は、綺麗な緑ね』

楽しそうに話をするエリカを眺めていると出し抜けに言われた。今までそんな風に自分を評した人間は居らず、どう答えていいのか分からなくなった。